

刑事コロンボ

根室市外三郡医師会
町立別海病院

やまうち
山内

おさむ
修

1968年から2002年まで全69作品がつくられた「刑事コロンボ」。一話ごとに有名人が犯人役で登場し、冒頭で犯行が行われます。ピーター・フォーク氏演ずる刑事が、思いも寄らない手掛かりからアリバイやトリックを崩していき、真相を解明していく倒叙ものの連作です。

2018年に「視聴者が選んだベスト20作品」がNHK-BSで放送されました。これは米国初放送から50周年記念として、NHKが「あなたが選ぶ！思い出のコロンボ」として投票してもらったものです。視聴した方もいると思いますが、上位5作品を列記します。

- 5位「パイルD-3の壁」
- 4位「溶ける糸」
- 3位「忘れられたスター」
- 2位「二枚のドガの絵」
- 1位「別れのワイン」

20作品すべて素晴らしいものです。中には建物のセキュリティが甘かったり、映像フィルムやカセットテープ・固定電話でのトリックもあり、時代を感じさせるものもあります。私の一押しは2位の「二枚のドガの絵」です。これを黒田研二氏と鯨統一郎氏も「私の愛する本格ミステリ・ベスト3」で推しています、〈テレビ作品〉と断って¹⁾。

「刑事コロンボ」的といえば、テーマ音楽と共に思い出されるのが「古畑任三郎」です。脚本は三谷幸喜氏。記念すべき第1回目の放送は「死者からの伝言」、なんと中森明菜氏が犯人役です（1994年4月13日）。明菜氏のテレビ露出が少ない昨今、そして氏出演ドラマのDVDが手に入りにくい状況にて、これは貴重な作品だと思っています²⁾。ここでの明菜氏の役は人気コミック作家で、被害者を別荘の地下倉庫に閉じ込めて窒息死させます。

あれっ、これは先の「コロンボ視聴者ベスト20作品」の16位「死者のメッセージ」にソックリです。コロンボでは犯人役はルース・ゴードン氏。映画「ローズマリーの赤ちゃん」(1968)³⁾で不気味な老婦人を演じ、アカデミー助演女優賞を受賞しています。このゴードン氏が女流推理小説作家（アガサ・クリスティ風）を演じ、被害者を密閉金庫に誘導し、酸欠状態にして犯行を行うものです。三谷氏は、きっと物書きとしてアガサ・クリスティをリスペクトしているのでしょう。そして「刑事コロンボ」のオマージュとして明菜氏の第1回目を世に出した

のでは、と思っています。

脚本家・三谷氏は、外国の有名既存作品と同じようなタイトルをよく付けます。「古畑任三郎」では「間違えられた男」「最も危険なゲーム」など、舞台劇では「12人の優しい日本人」⁴⁾。山口智子氏が活躍するテレビドラマ「王様のレストラン」も傑作でした。2022年には菊池寛賞を受賞し、NHK大河ドラマも好評だった彼には、今後も面白くて極上の作品を期待しています。

「古畑任三郎」を当時テレビ放送で見ていた頃は、よくこんなに毎週面白い倒叙作を作れるな、と感心していたものです。田村正和氏のスマートでユーモアのある話術。最後に「読者への挑戦状」よろしく視聴者に考える時間を与え、CMのあと解決編に持っていく。これぞ正当に本格ミステリです。私の好きな作品は多々あるのですが、その中で一つ上げるとしたら「その男、多忙につき」です（1999年4月20日放送）。真田広之氏演ずる犯人と秘書役の磯野貴理子氏とのトークの面白さや、ホテル全景を使つてのアリバイ崩し。その最後の最後にズッコケが入る、笑わないではいられない作品です。

さて、皆さんはどの作品がお好きですか。

〈参考・補足〉

- 1) 光文社「本格ミステリ大賞全選評2001—2010」(2010)の434頁と438頁。推理小説作家・黒田氏の他の2つは、「アクロイド殺し」アガサ・クリスティ、「ダレカガナカニイル…」井上夢人。
- 2) この第1回目の20分頃に明菜氏のNG(?)あり。古畑の話術に一瞬素で笑ってしまう、お宝映像か。
- 3) ロマン・ポランスキー監督の初のハリウッド作品。原作は、当時の催眠薬・悪阻の薬サリドマイドとカルト宗教の掛け合わせ。主演のミア・ファロー大人気女優に。ポランスキーはこの作品の成功でロサンゼルスに居を構えるも、そこで妊娠8か月の夫人シャロン・テートが惨殺される（シャロン・テート事件 1969）。
- 4) 映画「十二人の怒れる男」(1957)。シドニー・ルメット監督、ヘンリー・フォンダ主演。文春文庫「大アンケートによる洋画ベスト150」(1988)で22位にランクイン。

